

出雲大社

神々が集う聖地・出雲に鎮まる
葦原中国の大神・大国主命

出雲は『古事記』『日本書紀』神話にとって非常に重要な意味を持つ、日本神話のふるさとである。その地に鎮まる出雲大社は日本最古の神社ともいわれ、神話世界と現世に生きる我々とはつながっていることを深く実感させてくれる聖地である。

神々の地として知られる出雲。その範囲は決して広くはないが、『古事記』や『日本書紀』に見られる日本神話の中で出雲を舞台に語られるものはたいへん多い。大国主神や須佐之男命など、出雲にまつわる神々も多彩だ。出雲大社は歴史・格式ともに格別の崇敬を受けてきた社なのである。

神話では天孫降臨の前に葦原中国の支配権が高天原へと譲り渡される説話が展開される。その「国譲り神話」の中に出雲大社の起源に触れた部分がある。

天照大御神の使者が高天原から地上の大国主のもとを訪れ、葦原中国を高天原に譲るように説いたとき、大国主は子どもたちにその決定を委ねた。御子神たちが同意したことで葦原中国は高天原に統治されることになるのだが、その

際、大国主は天照にある条件を求めた。

「天神の富み足りた御子の宮殿のように、地の底の硬い岩まで届く太い柱を建てて屋根には高天原まで届くほどの高い千木がそびえる宮をつくってください。そうすれば私は曲がりくねった道を幾度も通ってたどり着く奥の地に隠れ籠っておりましょう。また、我が子ら百八十の神々も背く者はいないでしょう」

天照の子孫が住まうような立派な建物を自分のためにつくつてくれないだろうか、そうすれば高天原に背くようなことは決してないだろう、という大国主の最後のお願いである。そして、この「柱が太く、千木の高い建物」こそが、現在大国主が祀られる出雲大社のことなのである。

古来より存在感を示す 出雲の巨大な神殿

千木というのは切妻の屋根の両端で木材を交差させる装飾のこと。



神楽殿に架かる大注連縄。他の神社とは逆向きにかけられているのが特徴だ



出雲神楽のひとつ「八岐大蛇」

現在も出雲大社の本殿の屋根には、高々と掲げられた千木を見ることのできる。その本殿は「大社造」と呼ばれる独特の様式で、古代の高床式住居を模したとされている。地面から社殿の床までの柱が長く、社殿自体も高層である。基本的に住居のかたちにとられているが、これは大國主が住居となるような建物を求めたことに沿ってつくられているようだ。

正門の鳥居をくぐると松並木の中に400メートルほどの参道が

とも他の神社とは違う点だ。出雲大社が特別な神域であることを示しているといえるだろう。

このような歴史を持つ出雲大社には、旧暦の10月になると日本全国からさまざまな神々が集まってくる。通常は10月を「神無月」というが、これは八百万の神が出雲に出かけてさまざまなことを相談するため、その間それぞれの土地から神がいなくなってしまうことからつけられたものだ。逆に神々の集まる出雲だけは10月を「神在月」と呼んでいる。そして、そうした伝承にもとづいて旧暦10月に行われるのが「神在祭」である。10日の夜になると、出雲大社の近くにある稲佐浜で、全国からやってきた神たちを迎える神迎神事が始まるのだ。

浜にはかがり火が焚かれ、浜に流れ着いた蛇を大國主の使い「龍蛇様」として神社に迎えるのである。龍蛇とは本来海神の使いであり、海の彼方から豊饒をもたらす海人に由来する神だと考えられているもの。この地では、神在祭

まっすぐ延びており、それを進むと八雲山を背にした本殿が見えてくる。現在の社殿の高さは24メートルあり、神社建築ではきわめて高いものだが、社伝によれば、かつてはその倍の48メートルの高さを誇っていたという。さらにそれ以前には96メートルもあったという説さえもある。

平安時代中期の天禄元年(970年)に編纂された書物『口遊』には当時の高層建築の代表格として「雲太、和二、京三」と記されている。

の頃に季節風によって浜に寄りついたセグロウミヘビを龍蛇様の形代としているのだ。

国譲り神話の中では、高天原から遣わされた神々も稲佐浜に現れている。出雲では神話が風土に根ざしており、それを祭によって伝承しているのが理解できよう。

迎えられた神々は、11日から17日までの7日間、出雲大社に滞在して神議りをおこなうとされており、この期間に執り行われるのが神在祭だ。祭の間、地元の人々は謹慎斎戒して歌舞音曲の類を控え、家の造作なども行われなくなるといふ。このような習わしから、神在祭は「御忌祭」ともいわれている。

**天神の子孫である
千家氏が宮司を務める**

また、11月23日に行われる古伝新嘗祭も特別な神事のひとつ。夜に「おじゃれもう(おいであれと申す)」という声境内に響きわたると、宮司である国造をはじめとする神官たちが祭場へ向かい着座

雲太とは出雲国の出雲大社、和二是大和国の東大寺大仏殿、京三は京都御所の大極殿のことを指しているが、出雲大社の存在感が伝わってくるようだ。

奈良の大仏殿が45メートルといわれていることから、出雲大社がそれをしのぐ48メートルあったとされていることもうなずけなくはないが、48メートルという高さについてはあくまで伝承のひとつと考えられてきた。

しかし、平成12年(2000年)に境内から直径約1.3メートルの柱を3本ままとめた柱が出土し、稀代の高層建築だったという説が現実味を帯びてきている。3本ままとめた柱の直径は約3メートルとなり、それらは800年ほど昔に伐採された材木であることも判明している。また、出雲大社に伝わる「金輪造管差図」という、本殿の柱などの様子を描いた図には、発見されたものと酷似する柱の配置が描かれており、巨大社殿の証明になりうるのではないかと注目を集めているのだ。

**旧暦の10月には
八百万の神々が集まる**

現在、出雲大社の本殿を含めた社殿は修造中である。出雲大社は60年ごとに社殿の造営を行う遷宮という歴史を有しており、今は平成25年(2013年)の「本殿遷座祭」に向かって造営が行われているのだ。

見どころのひとつが、出雲大社のシンボルでもある神楽殿の大注連縄。これは長さ13メートル、太さ9メートル、重さ5トンという巨大なもので、そのスケールの大きさは間近で見ると圧迫する迫力に満ちている。注連縄とは、神聖な場に不浄なものの進入を禁ずるために張る縄のことで、一般の神社では右から左にかけられている。しかし、出雲大社の注連縄は逆に左から右にかけられているのが特徴だ。

また、出雲大社の参拝方法は一般的な「二拝二拍手一拝」ではなく、「二拝四拍手一拝」となっているこ



境内にはすがすがしい空気が流れる

し、始められる。
小石を歯で噛む菌固や、琴板を打ち鳴らして歌われる神楽歌に合わせてなされる百番の舞、御釜の

まわりを稲と瓶子を肩にかついで
神官が青竹を杖にして「あらたぬし」と唱えながらまわる御釜神事など、さまざまな神事が厳かに行

在は第84代国造として千家尊祐宮司が受け継いでおり、まさに現代の暮らしが神話の上に成り立っていることを実感させてくれる地といえよう。



本殿の大屋根。「大社造」と呼ばれる独特の様式だ

祭神である大国主は仏教の大黒天とも結びついており、縁結びにご利益がある福の神としても信仰を集めている。神無月に出雲に集まる神々は人々の縁結びの相談をしているともいわれており、江戸時代には縁結びの神徳が全国に広まった。

また、『日本書紀』には国譲り神話の異伝が記されているが、それによると、高御産巢日命に命じられた天穗日命が、大国主を祀るために遣わされたという。そして、ほかの神社では官司にあたる、世襲の「国造」家の祖先はその天穂日命であると平安時代の『先代旧事本紀』は記しているのだ。現

**出雲参拝にまつわる
不思議な伝承も残る**
そのあまりの高さのため、平安中期から鎌倉時代の間だけでも7度の倒壊を経験しているという出雲大社。しかし、いくら大国主の要求とはいえ、なぜそれほどまでに巨大な神殿を建てる必要があったのだろうか。

『古事記』の中には、その理由の一端が垣間見えるような記述がある。
垂仁天皇の御代、天皇の子の本牟智和気命は髭が胸に垂れる年になってもしゃべることができなかった。しかし出雲の大神に参拝すると、話すことができるようになったという。そのため、大国主をないがしろにすることは許されず、きちんと祀らなければならな

いと認識されるようになったのだらう。それにより、壮大な神の宮を設けて御魂を鎮めるようになったわけだが、偉大な神への畏敬の念がうかがえるような逸話である。
出雲大社は古くは「杵築大社」と呼ばれており、天平5年(733年)に完成した『出雲国風土記』にもそう記されている。以来、明治4年(1871年)に至るまでその名で呼ばれていたことが、歴史の長さを物語っている。

を鵜に変えて海の底にもぐり、くわえてきた海底の赤土で平たい皿を数多くつくった。また、海藻の茎を刈り、燧白と燧杵という発火のための道具をつくり、神聖な火を鑽り出して、こう唱えたという。
「私が鑽った火が、高天原の宮殿を煤が垂れさがるほど盛んに炊きあげ、地の下では硬い岩に届くまで炊き固め、長い長い縄を海にのばして口の大きな立派な鱈を引寄せ、竹の台もたわむほどに盛り上げて、魚の料理をささげましょう。」
あなたのことをいつまでも祀り、お供えの食事も絶やさずに献じます、という意味の誓いである。

こうして大国主は姿を隠し、その子どもたちも天神に従うことに同意した。建御雷は高天原に戻って葦原中国の平定が終わったことを報告した。古に生まれた誓いが、出雲では現代まで滔々と受け継がれていることになる。そんな比類ない地で、悠久の時を感じてみれば、神々の息吹が聞こえてくるようだ。

ハーン(小泉八雲)である。
ハーンのように出雲では海原、山川、森や池など至るところに神々が宿っているとされている。『出雲国風土記』には実に399という数の神社が紹介されているのだ。ひとつの神社は普通地域神のみを祀るので、単純に計算しても出雲には400柱もの神々が存在するということになる。また『古事記』はその3分の1のボリュームを出雲神話の記述に割いているのである。
しかし、以前の出雲には「実態のない神話の国」という印象が強かった。学会でも、出雲は大和政権によって意図的に作られた机上

出雲大社の一年

- 一月 福神祭(旧暦元旦) / 大御饞祭 御飯供祭 / 説教始祭
- 二月 祈穀祭
- 三月 祖霊社大祭(春分の日)
- 四月 教祖祭
- 五月 例祭(勅祭) / 例祭 二之祭 神輿渡御祭 / 例祭 三之祭 出雲屋敷感謝大祭
- 六月 涼殿祭
- 七月
- 八月 出雲大社教大祭 / 神幸祭 / 爪剥祭
- 九月
- 十月 献穀祭 / 古伝 新嘗祭 / 謝恩祭 神迎祭(旧暦10月10日) 神在祭(旧暦10月11~17日) 縁結大祭(旧暦10月15日) 神等去出祭(旧暦10月17日)
- 十一月 祖霊社大祭(秋分の日)
- 十二月



出雲大社の神迎神事の様子

の世界という学説が主流だったの
である。

ところが昭和59年（1984年）に架空の国―出雲というイメージを覆す大発見があった。荒神谷遺跡から銅剣385本、銅鐸6個、銅矛16本が一度に出土したのだ。特に銅剣は一カ所からの出土数としては最多で、それまで日本中で出土していたすべての本数を上回る数だったのである。さらに西谷、加茂岩倉、田和山、妻木晩田といった、数々の注目すべき遺跡が発見されるに及び、実態不明な神話の国という出雲のイメージは払拭されていった。

また、古代出雲は越（北陸）との積極的な交易も行っていたようである。

現在出雲大社の宝物殿には、真名井遺跡から発掘された勾玉が収蔵されている。碧石（メノウ）とは明らかに輝きが違う透明度の高い緑色の特徴で、別名を「勾玉の女王」とも呼ばれるこの逸品は、北陸産翡翠を材料として弥生時代に製作されたと見られている。



涼殿祭の行列

発見されたのは江戸時代中期の寛文5年（1665年）のこと。出雲大社の境外摂社である命主社背後の大きな石の下から青銅製の銅矛とともに見つかったのだが、いずれにしても古代出雲が日本海ルートで北陸地域と強く結びついていたことは間違いない。古代出雲になんらかの強大な勢力が存在していたことは実証されたといっている。ちなみに荒神谷遺跡から出土した青銅器類は国宝に指定され、現在は島根県立出雲歴史博物館で常設展示されている。

その出雲の中心に鎮座する出雲大社では平成20年（2008年）4月から遷宮の期間に入っている。本殿から仮殿となる拝殿へと祭神・大国主大神が遷されたので、この期間に参詣する人は御仮殿にお参りすることになる。現在は平成25年（2013年）5月10日に予定されている本殿遷座祭への準備が着々と進められている。

「遷宮」とは本殿を従前とは違う位置に移築したり、御神体を移動させることをいう。式年とは定め

られた年という意味なので、定期的な遷宮のことを「式年遷宮」と呼んでいるのだ。

式年遷宮の周期は神社によってまちまちだが、出雲大社の場合は60年。昭和28年（1953年）以来の大事業となる。伊勢神宮の神明造、住吉大社の住吉造とともに日本の三大神社建築様式とされる「大社造」がダイナミックにその姿を現すのである。

また、平成24年（2012年）7月21日～11月11日まで、出雲大社と島根県立古代出雲歴史博物館を中心としたエリアで「神話博しまね」が開催されているので『古

事記』、『日本書紀』の神話世界をより深く理解するためにはうってつけだろう。

出雲市周辺には他にも見どころが数多い。

国引き神話の舞台である園の長浜や三瓶山を一望にできる奉納山や、国譲り神話の場所である稲佐浜もある。稲佐浜には国譲りの際に大国主と建御雷が交渉したという弁天島があり、夕陽スポットとしても人気だ。さらに景勝地として知られる出雲日御碕灯台も近い。

出雲を訪れた際にはぜひともまわってみたい。

※『口遊』とは平安時代中期に編纂された、貴族の子弟のための学習書のこと。
※40歳の時に来日したラファティオ・ハーンは、松江の土族の娘セツと結婚し小泉八雲と称した。

出雲大社

祭神 大国主大神
社格 式内社（名神大）、出雲国一宮で旧官幣大社
現在はお祭社で神社本庁の別表神社

創建年 不明
例祭 例祭（5月14～16日）
御利益 縁結び、商売繁盛、農耕・漁業守護、除災招福など

住所 〒699-0701
島根県出雲市大社町杵築東195

電話番号 0853-53-3100

式年遷宮で復活した、江戸時代の技法

現在、出雲大社では平成25年の式年遷宮に向けた準備が慌ただしく進められています。

特に注目すべきは本殿屋根の千木、鯉木、箱棟、鬼板の棟飾りに「ちゃん塗り」という伝統的な技法が採用されたことでしょう。ちゃん塗りとは江戸時代に確立したとされる日本の伝統的な塗装法のことを指します。主成分の松脂に荏胡麻油、灰、鉛を混ぜて塗りますが、今回の遷宮では

千木と鯉木には油煙を混ぜた「黒ちゃん」を、破風板や鬼瓦の社紋には、それに緑青を混ぜた「緑ちゃん」をそれぞれ塗っているのです。

前回の昭和の式年遷宮では銅板の取り替えが行われなかったため、実に明治以来130年ぶりに復活した技法ということになります。出雲大社を訪れた時には色鮮やかなちゃん塗りをぜひその目に焼き付けたいものです。



鮮やかに復活した本殿のちゃん塗り